

和泉式部日記における「月」

—月の描写と日記の構成意識をめぐつて—

綾 優 子

はじめに

和泉式部日記は、一介の受領の娘である女と冷泉院の皇子である帥宮（敦道親王）との、忍びの恋からはじまり女が宮邸にひきとられるまでの約十ヶ月間の恋の過程を、多くの贈答歌を用いながら記した作品である。その恋愛の過程を描く上で、女と宮の初めての逢瀬の場面や、宮が女をひとりやり車に乗せ人影のないところへ誘う場面など、女と宮の逢瀬の場面において月が印象的に用いられている。高橋良雄氏（¹）は、和泉式部日記に描かれる月と他の日記文学や歌物語における月の描写の数とを比較し、和泉式部日記の月の描写の多さを指摘した上で、次のように述べてい る。

日記の中に現れた月は、けんらんたる王朝の恋物語におけるもののはれを表現するにふさわしい景物であり、「わざとあはれなることの限りをつくり出す」も

— 48 —

のとしての月であるといえよう。……一方においては宮との情炎の恋の底にひそむ女の無常観を象徴するものとして現れたものもある。この女の無常観・虚無感は、やがて宮の心中にも入り込み、その共感の中で二人の愛の世界は形造られ、それによつてより深い愛の結びつきがなされていったのである。

この高橋氏の論は、これ以降、和泉式部日記の自然描写を述べる上で度々取り上げられ、和泉式部日記の月に単なる情景描写としての月以外の役割が担われている可能性を説いたものの先駆的な論となつてゐる。

ここで、あらためて、和泉式部日記中に登場する月の描写の分布を確認する。和泉式部日記全体は、

- 【一】 宮の訪れも頻繁になり、二人の気持ちは寄り添い、宮邸入りの話が浮上する期間
- 【二】 女と宮との恋の発端から、それ以後両者ともに心に動搖の多い期間

【三】十一月十八日に女が宮邸入りして以後の期間

の三つに大まかに区切ることができる⁽²⁾。それぞれにおいて、天象としての「月」の用例を数えると、【一】に二十、【二】に十、【三】は十二月十八日の宮邸入り当日の情景描写のみである。特に二人の関係が不安定な期間に多く登場し、一方で女が宮邸入りをした以降は一切見られなくなる。宮邸入りを境にして、その前後では作品中の月の扱われ方が大きく変わっているのである。

また、和泉式部日記は、時間的構成の曖昧さや日時的一致の多さから、全体を通して時間的把握に欠けた面が多くあることが從来から指摘されている。月の描写においてもそのような時間的把握に欠けた場面として、次の二つの場面が挙げられる。一つめは、九月二十日以降の有明の月と秋の夜の月」を詠んだ歌が女に贈られる場面である。

このようない矛盾点を踏まえて、吉田幸一氏⁽³⁾は、和泉式

部日記の特徴について、

素材配置の偏向や季外れの矛盾面は、時間的経過のねらいと見る所説には反証となることであろう。かくし

て、この作品は「恋愛意識の流れに影をやどする事物をありのままに直接に写しだす」という主題に重点を置くことによつて、時間的矛盾は克服されてゐるを見ることができ、そのやうに感ぜられるのは、この作品全体の筋立てに、虚構がほとんどなく、恋愛経過の展開がどこほりなく巧みに自然に、事物に裏付けられて叙述されているからであり、そのためには、素材の日付の正確さを期することもなしに、ひたすら感情の起伏、もつれ合ひ、ためらひ、悲哀、喜びなどの種々相を描き尽すことになつた作品である。

と述べている。また、鈴木一雄氏（全講）もこの日時の混乱や曖昧という矛盾点を、「歌日記的歌物語的性格」といふ視点から、

それぞれの和歌は、ためらい、まよい、こがれ、濡れる、そのときどきの二人の心のふれあい、たしかめあいの姿を伝え、贈答応酬の心理的な起伏曲折がそのまま、作品の山場をつくり、また場面のおちつきを示す。そこには劇的要素が乏しいかもしれない。しかし、心理的につらぬかれたものがある。いはばリリカル・プロットともいうべき構成なのである。

と説明している。

和泉式部日記の作品全体の構成が、時間的な経過ではなく恋愛の展開に主軸が置かれており二人の関係性の起伏を

念頭においていることは確かであろう。そのような作品の構成の特徴が、結果として時間的把握の欠落に繋がるといふ点は、和泉式部日記に描かれる記事が事実か虚構かといふ問題とは別問題として捉えるべきだと考える。そのため、

作品自体の虚構性については、作品全体の筋立てに虚構がほとんどないという吉田氏の前提に従つておく。しかしながら、和泉式部日記は「和泉式部物語」と呼ばれたり、作中において主人公を「女」と示したりして、三人称的視点で描かれていることがこれまでにも論じられている。そのような点を踏まえると、和泉式部日記における女と宮の恋愛に関する描写において、女の（あるいは宮の）感情という点のみから作品を理解することが妥当と言えるのかといふ疑問も生じる(4)。

本稿では、和泉式部日記における月の場面が、当時のどのような発想に基づくものなのか源泉を辿ることで和泉式部日記に描かれる月の特徴を明らかにし、かつそこから浮かび上がる二人の恋愛展開との関係性を、場面の構成意識に着目して検討していきたい。

—

本章においては、和泉式部日記における月の描写のうち、女と宮との恋愛の展開の中で大きな意味を持つ月の描写を

本文に沿つて順に六場面取り上げ、それぞれの場面ごとににおける月の描写の特色やその源泉を考察していく。

I. 初めての逢瀬の場面

ものばかり聞こえむと思ひて、西の妻戸に円座さし出でて入れたてまつるに、世の人の言へばにやあらむ、なべての御さまにはあらずなまめかし。これも心づかひせられて、ものなど聞こゆるほどに月きし出でぬ。

〔いと明し〕古めかしう奥まりたる身なれば、かかるところに居なはぬを。いとはしたなき心地するに、そのおはすところに据ゑたまへ。よも、さきざき見たまぶらむ人のやうにはあらじ」……
(二二)

この場面で日記中に初めて月が登場する。女邸の端近に

いる宮が、明るい月に照らされることを「いとはしたなき心地」と感じ、それを口実にして女の御簾の内に入ろうとする場面である。この場面において、「いと明し」を地の文とするか、宮の言葉とするかは見解が分かれる。地の文とするものは〈新註〉〈考注〉〈大系〉〈全講〉〈全注釈〉があり、宮の言葉であるとするものは〈全集〉〈詳解〉がある。どちらとどるかについての決定的な根拠はないが、「ものなど聞こゆるほどに月さし出でぬ」という描写からもわかるように、月光は女と宮が話をしている最中に射してきたものである。この描写のあとすぐに宮の発言があることから、月が明るく射し始めたことが宮の発言のきっかけ

けになつたと考えられる。したがつて、「いと明し」が地の文にせよ宮の言葉にせよ、そこに続く宮の発言には、月に明るく照らされることに対するなんらかの宮の意識がはたらいていることは間違いない。この点に関して、「いと明し」という月の情景を踏まえた上で、このとき宮が「いとはしたなき心地」と感じるのは、宮の心に「月に照らされること」を忌む俗信」があつたからとする説がある⁽⁵⁾。

「月を忌む」という発想の源泉は、白氏文集卷十四「贈内」中の「莫對月明思往事損君顏色減君年」に基づいていることが從来から指摘されている。傷心の妻に対して、月光を見て往事を思うことは容色を損なわせ寿命を縮めることになるということを詠つたこの発想は、竹取物語をはじめとして平安時代の和歌や散文にも度々用いられ描かれている。しかし、白氏文集、また白氏文集を典拠とする諸作品は、いざれも月を眺めて物思いをするということに対する危惧として描かれており、和泉式部日記における、宮のただ月に照らされているという状況には当てはまらない。したがつて、この場面における宮の「いとはしたなき心地」の理由を、白氏文集を典拠とする「月を忌む」という発想にのみからは考えられない。この場面での明るい月は、座り慣れない端近にいる宮にとって、落ち着かない気持ちをさらに強調させ、女の近くに行くための口実のひとつにしかすぎない。また、そもそもこの逢瀬において、宮が座り

慣れないと語る、端近なところにいなければならなかつたのは、女の応対が「西の妻戸に円座さし出でて入れたてまつる」というものであつたからである。宮が受けたこの女による待遇そのものは、宮の心情になにか影響をおよぼす点があつたのだろうか。當時において、妻戸口は正式な出入り口であり、女性を訪問した男性などは、妻戸口の簀子にすわつて応対されることが一般的なこととされていた。これに従うと、和泉式部日記の宮の来訪に対する女の対応には問題はなかつたようを考えられる。しかし、女を訪問し、妻戸口にて女の御簾の内に入ることを望む男の様子という、和泉式部日記に似た状況設定が、源氏物語において次のように描かれている。

今日は、簀子にあたまへば、裾さし出でたり。いと軽らかなる御座なりとて、例の、

御息所おどろかしきこゆれど、このごろなやましとて寄り臥したまへり。とかく聞こえ紛らはすほど、御前の木立ども、思ふことなげなるけしきを見たまふも、いとものあはれなり。柏木と楓との、ものよりけに若やかな色して枝さしかはしたるを、「いかなる契りにか、末あへる頼もしさよ」などのたまひて、忍びやかにさし寄りて、

「ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと

御簾の外の隔てありほどこそ、恨めしけれ」とて、長押に寄りゐたまへり。

(柏木④ 三三七—三三八)

「これにさぶらへとゆるさせたまふほどは、人々しき心地すれど、なほかかる御簾の前にさし放たせたまへる愁はしさになん、しばしばもえきぶらはぬ」とのたまへば、「さらば、いかがははべるべからむ」など聞こゆ。「北面などやうの隠れぞかし、かかる古人などのさぶらはんにことわりなる休み所は。それも、また、ただ御心なれば、愁へきこゆべきにもあらず」とて、長押に寄りかかりておはすれば、……(中略)「いづここにても御簾の外にはならひはべらねば、はしたなき心地しはべりてなん。いま、また、かやうにもさぶらはん」とて立ちたまひぬ。

(宿木⑤ 三九二—三九三・三九九)

やがて端に御裾さし出でさせたまひて、「いとなやましきほどにてなん、え聞こえさせぬ」と、人して聞こえ出だしたまへるを聞くに、いみじくつらくて涙の落ちぬべきを、人目につつめば、強ひて紛らはして、「なやませたまふをりは、知らぬ僧なども近く参り寄るを。医師などの列にても、御簾の内にはさぶらふまじくやは。かく人づてなる御消息なむ、かひなき心地する」とのたまひて、……

(宿木⑤ 四四四)

柏木卷の場面は、故柏木の正妻である落葉の宮の元へ、故柏木に落葉の宮の後見を託された夕霧が訪れる場面である。この場面において夕霧が落葉の宮の元に訪れるのは二度目で、一度目は、柏木が亡くなつたことに対する正式な弔問であつたため、簣子の内である庇の間に招き入れられたが、この場面における二度目の訪問は、夕霧自身の思いからきた行動であつたため、落葉の宮側は夕霧を簾の内に入れずに応対をする。その対応は本文中に「いと軽らかな御座」と、大納言という夕霧の高い身分には不相応な軽々しい対応であると述べられており、女房たちも落葉の宮に前回のように対応することを促していることがわかる。この場面において、夕霧の落葉の宮に対する好意がほのめかされるが、落葉の宮はそれには取り合わない。夕霧は御簾の外で応対されるのを「恨めしけれ」と表現し、落葉の宮との思いの違いを感じとつて嘆いている。

宿木卷の一つ目の場面は、中の君の元に、姉である故大君に想いを寄せていた薰が訪れた場面である。故大君の面影のある中の君に薰は強く惹かれながらも、今は匂宮の妻となつてゐる中の君に対して、あくまで後見人としての分別を守ろうとする場面である。中の君側は薰を御簾の外に招き、裾という敷物を敷いて応対するが、それに対しても薰は、「人々しき心地すれど、なほかかる御簾の前にさし放たせたまへる愁はしさ」というように、人並みの扱いでは

あるがそれが他人行儀であると情けなく感じている。

宿木巻の二つ目の場面は、中の君に対する思いをこらえることのできない薫が、中の君の元に訪れる場面である。中の君は気分がすぐれず話もできないと、御簾の外に褲を脱いて応対したが、それに対して薫は、気分が悪い時には祈禱する為、見知らぬ僧や医師までもが御簾の中に入れるにも関わらず、よく見知ったはずの自分を御簾の内に入れないので対応に不満を示している。

このように、源氏物語の柏木巻と宿木巻に見られる男の訪問と女の応対の例を見てみると、女が男を御簾の外に据えて応対することは、一般的な対応として認められるが、身分の高い男にとっては軽々しいと感じるものであつたようである。また、女との深い繋がりを求める男にとつてそれは他人行儀と感じる応対であり、女にとつても、迎えた男との距離は自身の男に対する意思表示の一つであつたようである。和泉式部日記における女と宮の身分も、女は一介の受領の娘にすぎないが、宮は冷泉院の皇子という大変高貴な身分であり、訪ねてくる宮の方が身分が高いといふ点で共通している。後に宮が女のことを「あやしいうげなきものにこそあれ、さるは、いと口惜しうなどはあらぬものにこそあれ。」(三一)と述べてゐるが、その発言からも、女の身分の低さは宮にとつても女との恋愛において意識されるものであったことが窺える。宮が女の応対に対し

て、身分上の居心地の悪さや、他人行儀な待遇への不満を抱いた可能性は十分考えられるであろう。宮の「いとはじたなき心地」の内実は、月に照らされることを宮がどのように感じたかという点以外にも、女の応対を宮はどのように受け取つたのかという点からも考察すべきである。しかしながら、宮が女の御簾の中に入るうとすることへの口実が、様々な点から考えられるにしろ、この初めての逢瀬が、月の明るい夜であつたということを宮、そして女の両者ともが認識していたことは変わりない。そして両者の距離を縮めるきっかけとなつたのが、宮を照らし出した明るい月光であつたということが確認できる逢瀬となつているのである。

II. 宮が女を「人もなき廊」に連れ出す場面

「いざたまへ、今宵ばかり。人も見ぬ所あり。心のどうにものなども聞こえむ」とて車をさし寄せて、ただ乗せに乗せたまへば、われにもあらで乗りぬ。人もこそ聞けと思ふ思ふ行けば、いたう夜ふけにければ、知る人もなし。やをら人もなき廊にさし寄せて、下りさせたまひぬ。月もいと明ければ、「下りね」としひてのたまへば、あさましきやうにて下りぬ。「さりや。人もなき所ぞかし。今よりはかやうにてを聞こえむ。人などのある折にやと思へば、つつましう」など物語あはれにしたまひて、明けぬれば……

二回目の月が描かれるこの場面は、女の男性関係の多さをつらく思い誰にも邪魔されずに女と話をしようと企てる宮に、女が「人もなき廊」までむりやりに同車行をさせられる場面である。月がひどく明るい中で宮に車から「下りね」と促されたため、女は「あさましきやう」と感じながら下車したと記される。ここで、「月もいと明ければ」の記述に関して、地の文とするものと、「月のいと明ければ、下りね」までを宮の言葉とするものとに分かれる。この違いは、「月のいと明ければ」が宮の「下りね」という言葉に係るのか、それとも女の「あさましきやう」という心情に係るのかという解釈の違いから生じたものである。宮は女を車に乗せる際、「人も見ぬ所あり。心のどこにものなども聞こえむ」と述べており、さらに女が車から下りた後、「さりや。人もなき所ぞかし……」と述べていることを踏まえると、宮にとつては女との関係を誰にも邪魔されない場所であるかどうかが重要なのであり、宮にとつて都合の良い場所に月明かりは関係していないようと思われる。したがつて、宮の「下りね」という発言の原因を「月もいと明ければ」とは考えられない。「月もいと明ければ」は「下りね」という宮の発言の一部ではなく、あくまで情景を描いた地の文である。そして、「月もいと明ければ」は、女が「あさましきやう」と感じる原因とするのが妥当であろう。さらに、この女の「あさましきやう」という心情に

関して、〈新大系〉は、「月は明るくて、すべてがあらわである。この時に、車から降りるのは、当時の女性として『あさましき』ことであるに違いない。」としている。それに関して、紫式部日記にも、女性が車から降りる際に月に照らされることをあまりが悪く思う次のような記述が見られる。

殿司の侍従の君、弁の内侍、つぎに左衛門の内侍、殿の宣旨式部とまでは、次第しりて、つぎつぎは、例の心々にぞ乗りける。月のくまなきに、いみじのわざやと思ひつつ、足をそらなり。……

(寛弘五年十一月十七日 一七二)

また、蜻蛉日記においては、道綱母が夫兼家のいる廊に向かい車から降りる際、廊に灯しておいた火を消させるという次のような描写が見られる。

人はいかがは思ふべきなど思へど、われもまたいとおぼつかなきに、たちかへりおなじことのみあるを、いかがはせむとて、「車を給へ」と言ひたれば、……火ともしたる、かい消たせて降りたれば、いと暗うて、入らむかたも知らねば、「あやし、ここにぞある」とて、手を取りて導く。……

(上巻 康保三年三月 一四二)
蜻蛉日記の、道綱母が車から降りる際に、灯されていた火を消すと入り口がわからなくなるにも関わらず、わざわざ

火を消させるという点には、道綱母自身の姿があらわにないことへの懸念が強く現れていると言えるであろう。これが、紫式部日記や和泉式部日記のように、自ら消すことのできない月明かりとなればなおさらではないだろうか。この抵抗感が和泉式部日記の女の「あさましきやう」の心情の原因のひとつと考えられるのである。さらに、この同車の出来事を女は二、三日後に

宮にて月の明かりしに、人や、見けむと思ひ出でらるるほどなりければ

(三四一三五)

と回想している。このことを踏まえると、女にとつて宮との忍びの恋を誰かに見られてはいいかということを危惧する気持ちも、月の明るさを気にする要因のひとつと考えられるのではないだろうか。このような、人に見られることへの懸念というのは、蜻蛉日記の道綱母の「人はいかがは思ふべきなど思へど」という心情と共通する部分があるだろう。姿があらわになることへの危惧、さらにそれを誰かにみられていないかという懸念が、和泉式部日記のこの場面における女の月明かりへの思いの念頭にあると考えられる。

このように、和泉式部日記において宮による強制的な同行は女にとって不本意なものとして描かれる一方で、前述したように、後に女が回想する宮との逢瀬の場面としても再び登場し、深く印象付けられた出来事として描かれて

いるとも言える。このような、男が女を車に乗せて連れ出すという展開は、当時の物語作品にもよく見られる。和泉式部日記のように、身分の高い男が自分より身分の低い女を連れ出すという例は、源氏物語の光源氏が夕顔を連れ出す場面、匂宮が浮舟を川向こうの邸に連れ出す場面に見ることができる。

……なほうちとけて見まほしく思ほざるれば、「いざ、

ただこのわたり近き所に、心やすくて明かさむ。かくてのみはいと苦しかりけり」とのたまへば、「いかでか。にはかならん」といとおいらかに言ひてゐたり。

この世のみならぬ契りなどまで頼めたまふに、うちにくる心ばへなどあやしく様変りて、世馴れたる人ともおぼえねば、人の思はむところもえ憚りたまはで、右近を召し出でて、隨身を召させたまひて、御車ひき入れさせたまぶ。…… (夕顔① 一五七一五八)

……いさよふ月にゆくなりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲がくれて、明けゆく空いとをかし。はしたなきほどにならぬさきにと、例の急ぎ出でたまひて、軽らかにうち乗せたまへれば、右近ぞ乗りぬる。……女恥ぢらひて絶えなむ

心細く」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、……

(夕顔① 一五九—一六〇)

……夜のほどにてたち帰りたまほんも、なかなかなべ
ければ、ここの人目もいとつましさに、方にたば
からせたまひて、川よりをちなる人の家に率ておはせ
むと構へたりければ、先立てて遣はしたりける、夜更
くるほどに参れり。「いとよく用意してさぶらぶ」と
申さす。……かき抱きて出でたまひぬ。……

いとはかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき
舟に乗りたまひて、さし渡りたまほど、遙かならむ
岸にしも漕ぎ離れたまやうに心細くおぼえて、つと
つきて抱かれたるもいとらうたしと思す。

(浮舟⑥ 一五〇)

これらの源氏物語の三場面と和泉式部日記の同車行の場
面には、次のような共通点が見
られる。

① 男の連れ出す目的が、人目のつかないところで女と
過ごすということにある点

② 女が連れ出されるにあたって、その心情に不安や躊
躇がみられる点

これらの点を踏まえると、物語において多く描かれる「男
が女を連れ出す」という題材は、当時の物語によく用いら
れる話の型のひとつであつたと考えられる。また、和泉式
部日記や源氏物語のように、男の方が身分が高いという身

分違ひの恋の場合、それが男の強制的な行動である点やそ
れに対して女は不安を抱えているというような物語の展開
にも一種の類似点が見られると言える。それだけ当時の読
者にとって関心を引く物語展開であったからこそ、物語作
者は作品に積極的に取り入れていたのではないだろうか。

源氏物語夕顔、浮舟の場面との共通点も踏まえると、和泉
式部日記における同車行の場面は、非常に物語性の強い展
開であると言える。この同車行の出来事が後の場面にて女
と宮の双方によつて回想されることから、女と宮にとつて
印象深い出来事として位置づけられていることが分かる
が、それと同時に、この場面を読んだ当時の読者にとつて
も印象的な場面として読まれたと考えられる。それだけ読
者を意識しているからこそ、日記内に描かれることとなつ
た出来事であり、その展開の構成も当時の物語の型に寄せ、
意識的に日記内の印象的な場面という位置づけがなされて
いる場面であると考えられるのである。

III. 同車行を回想する場面

二三日ばかりありて、月のいみじう明き夜、端に居て
見るほどに、「いかにぞ。月は見たまふや」とて、

わがごとく思ひは出づや山の端の月にかけつつ嘆
く心を
例よりもをかしきうちに、宮にて月の明かりしに、人
や見けむと思ひ出でらるるほどなりければ、御返し、

ひと夜見し月ぞと思へばながむれど心もゆかず目
は空にして

と聞こえて、なほひとりながめたるほどに、はかな
くて明けぬ。

(三四一三五)

この場面では、宮が女を「人もなき廊」まで連れ出した同車行の出来事の、二、三日後のことが描かれている。月を眺めて宮との同車行の夜を思い出していた女のところに、ちょうど宮から、月を眺めて先夜の同車行の逢瀬を思い、今女に逢えないことへの嘆きを詠んだ歌が贈られてくる。その時宜を得た宮からの贈歌に対し女は趣深く思いながら、同車行の時と同じような今夜の明るい月を眺めて宮を思うと同時に、自身の心の晴れない様子を詠んだ歌を宮に返す。その夜は結局、宮の訪れはなく、一人で女は月を眺めて夜明けを迎えることとなる。

この場面において、初めて歌に月が詠まれる。その贈答歌にそれとのどのような心情が表れているのかを詳しく見ていく。

まず、宮の贈歌から確認する。

わがごとく思ひは出づや山の端の月にかけつつ嘆く心
を

この歌の「わがごとく思ひは出づや」という言葉から、宮は、女と共に経験し、女も当然覚えているはずの過去の出来事を思い出してこの歌を詠んでいることがわかる。そ

の出来事とは一体どの出来事を指すのだろうか。諸注釈においては先夜の同車行の出来事を指すと述べられている。ではそれはどのような記述から言えることなのであるうか。そのことを考える際の手がかりは、宮の歌の前の記述に見ることができる。この歌は「いかにぞ。月は見たまふや」と、月を見ているかどうか女に問い合わせる言葉と共に文の中に詠まれていると記述がある。問い合わせのように、宮が女も見ているか期待したこの夜の月は、場面冒頭にて「月のいみじう明き夜」と描写されている。これは、IIで挙げた宮と女の同車行の場面の「月のいと明ければ」という月の情景描写と類似している。以上の、宮と女が共に経験した出来事であり、宮が文に書くこの夜の月が、同車行の場面の月の描写と類似するという点を踏まえると、宮の歌の「わがごとく思ひは出づや」は日記内に記された記事である、前述したIIの同車行の場面の出来事を指していると考えてよいだろう。このことを踏まえた上で第三句以降を見ていく。「山の端」とは、山の稜線のことを指す言葉であり、宮の歌中の「山の端の月」のように、月とともに歌に詠まれることが多い。その例は万葉集、古今集、後撰集にも見ることができる。

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れ
ずもあらなむ
おしなべて峰もたひらになりななむ山の端なくは月も

入らじを

伊勢物語第八十二段にも収録される贈答であるが、この贈歌は古今集に業平の歌で收められ、答歌は後撰集では上野岑雄の歌で、第五句が「月もかくれじ」とある。当時は「山の端」は月が入つていく（出ていく）場所であるという認識があつたことがこれらの歌からも確認できる。それにより「山の端」は月とともに詠まれることが多くなったと考えられる。また、「山の端」は情景だけではなく、何かに例えられた月を隠してしまるものであり、引き止めようのないものの例えとして歌に詠まれていると言える。そのような月の入る（出る）のを惜しむ歌は他にも、後撰集

のかずならぬ身は山のはにあらねどもおほくの月をすぐ
しつるかな
や、蜻蛉日記の道綱母が自邸から出て行こうという素振り
をする兼家に対して贈つた、
いかがせむ山の端にだにとどまらで心も空に出でむ月
をば
(上巻天徳元年七月~十月 一一二)
にその例が見られる。

和泉式部日記の宮の歌における月は、前述したように、その夜の明るい月という情景を描写すると同時に、同車行の出来事を思い出させるという意味を持つ月である。第四句目の「月にかけつつ」とは、月に思いを寄せる、思いを

託すの意であり、月を見ながら同車行での逢瀬を思い出し物思いにふける宮の様子が映し出されている。月が山の端に入つてしまつことで、二人で過ごした逢瀬を思い出させてくれる月が見えなくなつてしまつことを嘆く意と、同車行のことを思い出すことで、それ以降叶つていない逢瀬を嘆く意が含まれていると言えよう。

次に、宮の歌に対する女の返歌を検討する。以下、改めて女の返歌を確認する。

ひと夜見し月ぞと思へばながむれど心もゆかず目は空にして

女が宮の贈歌を読んだときのことは、「例よりもをかしきうちに、宮にて月の明かりしに、人や見けむと思ひ出でらるるほどなりければ」と表現されている。この記述から、場面冒頭の「月のいみじう明き夜、端に居て見たまふや」という女の行動の際、宮が贈歌で詠んだのと同じように、女の方でもⅡの同車行の月夜の出来事を思い出していたことがここで明らかになる。しかし、宮と女が月を通して同じ同車行の出来事を思い出してはいるものの、女の同車行に対する思いには、宮の贈歌からは窺えない思いを読み取ることができ。それは、「人や見けむと思ひ出でらるるほどなりければ」という記述からわかる、誰かに見られていないかたかどうかという不安の念である。月に照らされることと、忍ぶ気持ちを結びつけたものは他の和歌に

も見ることができる。

月しあれば明くらむわきも知らずして寝て我が来しを
人見けむかも
よにかくれきつるかひなく紅葉ばも月にあかくぞ照り
まわりける

(万葉集二六六五)

(貫之集二四七)

人しれずきつる所に時しもあれ月のあかくぞ照りわた
るかな

(貫之集五〇二)

万葉集では、まだ月が出ていたときに恋人のもとから帰
つたことで誰かに見られなかつたかを危惧する気持ちが、
貫之集(正保版本)では人目を忍んで来たにも関わらず不
本意にも月に照らされる様子が詠まれている。これらに見
られるように、「忍び」と「月」は相反するものとして同
時に描かれる。このことと、和泉式部日記の「人や見けむ
と思ひ出でらるほどなりければ」の記述を踏まえると、
和泉式部日記の女の歌に詠まれる月には、先夜の逢瀬を思
い出させると共に、忍びの恋という他者の目を気にする気
持ちを読み取ることができるのではないか。女の歌

の「心もゆかず目は空にして」の理由について、
(新全集)
(注釈)(全講)が言及しているが、それらは、宮の来訪
がないために心が晴れないとしている。しかし、この場面
における女側の月の認識から考えると、そこには誰かに見
られてはいなかつたかという、忍びの恋へのためらいの気
持ちも含まれていると考えられる。

このようにして、この場面に登場する月は、これ以前の
同車行の出来事を呼び起す材料という点では共通してい
る。しかし、宮からの贈歌では、明るい月は同車行での逢
瀬を思い出させ、女との逢瀬を願うための象徴として描か
れるが、女においての明るい月は、同車行での逢瀬を思
い出させるものの、それと同時に、誰かに見られていなかつ
たかという懸念やためらいをも思い出させるものとしても
描かれている。同じ月を眺め、同じ出来事を思い出しながら、
その両者の心はびつたりと重なつているとは言いが
たいことが、両者の月に対する思いから窺えると言えるの
ではないだろうか。

IV. 月の和歌四首を詠み合う

かくて、のちもなほ間遠なり。月の明き夜、うち臥し
て、「うらやましくも」などながめらるれば、宮に聞
こゆ。

月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでも

たれに告げよと【一】

樋洗童して、「右近の尉にさし取らせて來」とてやる。

……(略)女は、まだ端に月ながめてゐたれるほどに、
人の入り来れば、簾うちおろしてゐたれば、例のたび
ごとに目馴れてあらぬ御姿にて、御直衣などのいた
うなえたるしも、をかしう見ゆ。……(略)近う寄ら
せたまひて、「今宵はまかりなむよ。たれに忍びつる

ぞと、見あらはさむとてなむ。明日は物忌と言ひつれば、ながらもあやしと思ひてなむ」とて帰らせたまへば、

「ころみに雨も降らなむ宿すぎて空行く月の影や」とまると【ii】

人の言ふほどよりもこめきて、あはれにおぼさる。「あが君や」とて、しばし上させたまひて、出でさせたまふとて、

「あぢきなく雲居の月にさそはれて影こそ出づれ心やは行く【iii】

とて、帰らせたまひぬのち、ありつる御文見れば、われゆゑに月をながむと告げつければまことかと見に出でて来にけり【iv】

とぞある。「なほいとをかしうもおはしけるかな。いかで、いとあやしきものに聞こしめたるを、聞こしめしなほされにしがな」と思ふ。(三七一三八)

この場面は、宮のおいでが遠のいていた月の明るい夜、自邸で月を見ながら物思いにふける女が宮に贈った【i】の歌をきっかけに、宮が女の邸にやつて来てやり取りをする場面である。このとき宮は女邸にやつて来たものの、先夜訪問した際に他の車が女邸に止まっていたのを見て、女の多情さへの疑念を持つていたことや、この日は物忌みで宮中にこもらなければならぬことが重なつたため、女と

共に一夜を過ごさずに文だけ置いて早々に帰ろうとする。それに対しても女は、我が家に留まらない宮を「空ゆく月」に例えてその寂しさを【ii】の歌で詠み、宮もそれに対して「雲居の月」を詠んだ【iii】の歌で応答し、意に反して物忌みのために帰らなければならない旨を伝える。宮の帰宅後、宮が持つてきた文を女が広げたことで、ここで初めて女の【i】の贈歌に対応する宮の返歌である【iv】の歌の内容が明らかになり、女はその内容に満足し宮への想いをあらためて確かなものだと認識するという場面である。この場面で交わされる歌にはすべて月が詠まれていることが特徴的である。

女の「うらやましくも」の言葉は、拾遺和歌集雜歌上、藤原高光の

「かくばかり経がたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな」(四三五)

を引歌としていることが従来の研究において指摘されている。この歌は、自分は物思いにふけつて心が晴れないが、その時の月は澄んでいて、何も物思いのなさそうに見えてしまましいと、自身と月を対比して詠んだ歌である。和泉式部日記において、「月の明き夜」に女が月を見ながら物思いにふけつている様子が、この引歌によつてより強調されていると言えるであろう。次に、【i】から【iv】までの歌から読み取れる月について見ていく。まず、【i】の女

の贈歌を確認する。

月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでもたれに告げよと

この歌の「荒れたる宿」は、女自身の邸を指して言つたものである。この「荒れたる宿」は歌語として歌に詠まれることも多い。その用いられる方は、

人すまずあれたらやどをきて見れば今ぞこのはは錦お

りける

(後撰集 四五八)

いかでかの年ぎりもせぬたねもがなあれたる宿にうゑて見るべく

(後撰集 一一〇九)

きみなくてあれたらやどのいたまよりつきのもるにも

そではぬれけり

(和漢朗詠集 五三七)

に見られるように、そこに住んでいた人物が亡くなつたり、通いが無くなつたりして住まなくなつてしまつたことによるその寂しさや虚しさを「荒れたる宿」として表現する際に用いられている。また、それ以外にも、

九重の内だに明かき月影に荒れたる宿を思ひこそやれ

(拾遺集 一一〇五)

に見られるように、宮中と我が家を対比させる際に、「我が家を「荒れたる宿」と表現することでその宮中の素晴らしさをより際立たせるために用いられる例も見られる。和泉式部日記におけるこの場面は、冒頭の「かくて、のちもなほ間遠なり。」という記述から、宮は女の邸にしばらく訪

れていないことがわかる。したがつて、これらのこと踏まえると、【i】の女の歌における「荒れたる宿」は、宮の来訪がないために家が寂しいということを表していると

考えられる。またそれと同時に、女自身の家を「荒れたる宿」と表現することで、他でもなく、宮中で暮らす宮に対して贈つているという、歌を贈る対象をより強調する効果を読み取ることができるのではないだろうか。

また、女が月を見て誰かを想い、独り物思いするという、和泉式部日記の女の状況とよく似た状況を詠んだものとして、白氏文集(巻十五)に次のような漢詩がある。

滿窓明月満簾霜 被冷燈殘拂臥牀

燕子樓中霜月夜 秋來只爲一人長

当時において、女が家で独り月を見て物思いをするという情景は、女性の一途な姿を表したものだという発想があつたのではないかだろうか。

以上のことから、女の【i】の歌は、「荒れたる宿」という表現から女の家に宮しか通う男がいないということと、その宮の訪れすらなく寂しい様子を表していると考えられる。さらにそこに、独り家で月を眺めるという、当時の世間でよくイメージされた女の一途さを現す情景を付加することで、宮に対する一途さをより強調させていると言えるのではないだろうか。また、宮はこの場面以前に、

松山に波高しとは見てしかど今日のながめはただなら

という、宮自身が女の多情さに対して強い疑惑を持つており、女を責めたてる内容の歌を直接女に向けて贈っている。これにより、女の方も、宮が自分を浮気な女だと強く感じていることに気づいていることは確かである。先に述べたように、女は【i】の歌において宮の訪問がなく寂しい様子や、宮への一途な想いを強調するが、その一途さの主張の根底にあるのは、宮が自分を多情な女であると思つていてことに対する反発や、その疑惑を撤回させたいという女の気持ちであるのではないだろうか。以上のことを踏まえて、【i】の女の歌の返歌にあたる、宮の【iv】の歌を確認する。

われゆゑに月をながむと告げつればまこと見に出でて来にけり

「われゆゑに月をながむ」という言葉から、宮は、月を見て想いを寄せるのは他でもなく宮以外にいないという女の主張を汲み取ったと言える。そして下の句で、それが本当かどうか確かめに来たと述べている。さらに、女の贈歌の「ながむ」「告げよ」「見に来む」に対応した形で「ながむ」「告げ」「見に出でて来にけり」という語を使って返しており、非常に率直な返歌であるように感じられる。

女はこの返歌を見て、「なほいとをかしうもおはしけるかな」と、あらためて宮の素晴らしいを再確認している。実

際に逢瀬で交し合つた【ii】【iii】の贈答歌ではなく、文に記された【iv】の返歌によってそのような評価に至るということは、【iv】の歌がより女の心を打つものであったからであろう。それは宮の返歌が女の贈歌に対して的確に対応していたことで、女の贈歌に込められた、思いを寄せるのは他でもなく宮であるという一途な想いを汲み取つてもらえたという確信を得ることができたからではないだろうか。【i】の女の贈歌をきっかけにして宮が女の邸にやつて来るが、その逢瀬にて交わされた、【ii】【iii】の贈答歌にもそれぞれ月が詠まれている。それらの月は一体どのようなことを表しているのだろうか。まず、女の贈歌に当たる【ii】の歌を確認する。

こころみに雨も降らなむ宿すぎて空行く月の影やとまると

この歌は、女が、邸から帰ろうとする宮のことを「空ゆく月」に例えて、雨でも降れば宮は自分の邸から帰らずにいてくれるだろうかと、宮に邸に留まつてほしいという気持ちを詠んだ歌である。この歌のように、恋人を月になぞらえて逢瀬を願う歌は拾遺集に次のような例が見られる。

みか月のさやかに見えず雲隠見まくぞほしきうたてごのごろ

(七八三)

秋の夜の月かも君は雲隠れしばしも見ねばこゝら恋しなき

(七八五)

久方の天照る月も隠れ行何によそへて君を偲ばむ

(七八九)

これらから、不变的に空を渡つていく月を恋人に例えることで、叶う望みの少ないながらもその逢瀬を願う気持ちを表現するのに使われていると言える。女の歌でも、宮が帰つてしまふことはどうしようもないことであると察しながらも、それを何とかして引き止めたい気持ちが表れないと考えられる。

次にこの贈歌に対する宮の返歌である【iv】を確認する。

あぎちなく雲居の月にさそはれて影こそ出づれ心やは
行く

「雲居」とは、雲のある遠くの空や、遙か遠くに離れた場所を指す言葉である。その遙か遠くという意が転じて、

古典作品の中でしばしば「宮中」という意味で用いられている。宮の【iv】の歌でも、「雲居の月」で「大空の月」の意を指し、それに惹かれて帰るという意がこめられていると言える。さらに、〈新全集〉(詳解)はその意に付け加えて、「雲居」により「宮中」を暗示させ、宮中での物忌みのためにどうしても帰らねばならない理由を示しているのだと指摘している。下の句は、女の歌の「影やとまる」とを受けて、影(身体)は出て行くが、心は出て行かず女のものとに留まりますと返したものである。この贈答歌において女は月を宮に例えて詠んだが、宮は月を「大空の月」

という情景、また、「宮中」を暗示させるというように、月の指すものを女の贈歌から言い換えて歌にしていることがわかる。先に述べた【i】・【iv】の贈答歌では、女も宮も、月を、宮のことを想つて物思いさせる原因として詠んでおり、その意は一致しているが、逢瀬にて交わされた【ii】・【iii】では、その月の指す意味は両者で食い違つていると言える。女が、逢瀬で実際に読みあつた【ii】・【iii】の贈答歌ではなく、文に書かれていた、宮による【iv】の歌を読んで初めて宮のことを「なほいとをかしうもおはしけるかな」と評価する記述が見られるのも、月が指示示すものの両者での一致が影響し得ると考えることができるのではないか。

V. 女が手習い文を贈る場面

この場面は、女の邸に宮の来訪があるものの女の方がそれに気づかなかつたため、女の家の門は開けられず逢瀬が叶わないまま宮は一人で有明の月下待ち尽し、明け方女に有明の月を詠んだ歌を贈つてそのむなしさを伝える場面である。しかし、女は宮の来訪があつた時間、宮の来訪にこそ気付かなかつたものの、宮のことを想いながら手習いを書き付けていたのであつた。宮からの明け方の文で昨晩宮の来訪があつたことを知つた女は、その手習いをそのまま文として宮に贈ることで、決して眠つていた訳ではないということと、自分も宮のことを想い、宮との逢瀬を願つて

いたことの弁解と証明をする。その手習いを読んだ宮は、すかさず手習い文の中に書かれていた和歌に対する返歌を五首並べて文にして贈り、女の意を汲み取ったということを示すのである。

和泉式部日記のこの場面の女の手習い文は一つの詩のように長いことも特徴的である。さらに手習いに対して宮が和歌五首を連ねて返すという贈答の形も、他の平安日記文と比較しても異例な場面と言え、鈴木一雄氏〈全講〉はこの場面について「この感想文はそれだけで、あるいは宮からの五首の返歌を加えて一まとまりの資料、独立性のつよい素材であつたろう」と述べている。

この場面における宮の贈歌や女の手習い文の中の歌にも月が登場する。さらにこの場面において「長月の有明の月」という具体的な月が描かれる。和泉式部日記の特質を、女と宮の独自の共感性の存在にあると木村正中氏⁽⁶⁾が述べているが、その共感性の表れとも言える「おなじ心」という言葉が、この場面において日記内で初めて女と宮の両方の歌に登場する。つまり、これまで月に寄せて詠まれた女と宮の想いは様々であったが、この場面において詠まれる、月を用いた贈答歌においては、その思いが重なつたことが「おなじ心」という言葉ではつきりと記されるのである。この場面以降、宮が女の多情な噂に対し疑惑を持つているような記述はなくなり、女の宮邸入りの話が浮上するな

ど、二人の仲はより親密さを増していくと言える。また、この場面以前にも、宮の来訪がありながら女の方がそれに気付かず、逢瀬が叶わなかつた場面が二度ある。それらの場面においては、宮の女に対する疑念が深まるという結果に終わつたが、この手習い文の場面においては、女と宮が互いにその歌の贈答から満足を得るという結果になつてゐる。この点からしても、他の叶わぬ逢瀬とは異質な場面と言える。この場面は、逢瀬は叶わなかつたものの、手習い文と和歌五首のやり取りがそれ以後の二人の恋愛の発展に効果的に作用した重要な場面であると言えるだろう。この場面は、次章で、「長月の有明の月」が和歌にどのような効果をもたらす情景であるのかを含め、女と宮の恋愛の過程でどのような役割を果たす場面なのか、さらに詳しく検討する。

VI. 宮が女を自邸に置くことを決心する場面

かくて、二三日おともせさせたまはず。頬もしげにのたまはせしことも、いかになりぬるにかと思ひつづくるに、寝も寝られず。目もさまして寝たるに、夜やうやうふけぬらむかしと思ふに、門をうちたく。あなおぼえなど思へど、問はすれば、宮の御文なりけり。思ひがけぬほどなるを、「心や行きて」とあはれにおぼえて、妻戸押し開けて見れば、

見るや君さ夜うちふけて山の端にくまなくすめる

秋の夜の月

うちながめられて、つねよりもあはれにおぼゆ。門も開けば、御使待ち遠にや思ふらむとて、御返し、ふけぬらむと思ふものから寝られねどなかなかれば月はしも見ず

とあるを、おしたがへたる心地して、「なほ口惜しくはあらずかし。いかで近くて、かかるはかなしことも言はせて聞かむ」とおぼし立つ。(六一―六二)

この場面は、物思いをしてなかなか寝ることのできないまま夜を過ごす女の元に、ちょうど宮から文が届き、女は「心が通じたのだろうか」と喜びながら歌を返す場面である。からの返歌を詠んだ宮は、女を自邸入りさせ身近に響を与えることとなつた歌が詠み交わされる場面である。その贈答歌においても月が詠まれている。まず、宮の贈歌から確認する。

見るや君さ夜うちふけて山の端にくまなくすめる秋の月

この歌は、美しく澄んだ秋の夜の月を、自分と同じように眺めているかどうかを女に問い合わせたものである。しかし、この場面は、それ以前の日記にある記述から、「十月十日ほど」(五三)以降の出来事であるため、季節は冬にあたる。それにも関わらず宮の歌にて「秋の夜の月」と詠まれ

ていることについて、季節の矛盾が見られることが従来から度々指摘されている。〈考注〉は、現存本は「一種の草稿本」であると考え、整理の行き届いていないさまであるとし、吉田幸一氏⁽²⁾は、これは九月十三日の記事であるがそれが十月の記事に紛れ込んだとし、〈全講〉は、作者の作品の全体的統一把握の強さが上回って季節を越えて現存位置にはめこんだ、あるいははめ込まざるをえなかつたのではないかと説明している。この矛盾が作者の作品構成上の意図的なものであるのか、そうでないのかは見解が分かれるところであり、日記本文から判断するのは難しい。しかしながら、この誰が見ても明らかな季節の矛盾は、一方で、この場面の出来事は作者が執筆する上で、作品の中に取り込まずにはいられない重要なやり取りであつたということの表れでもあると言えるのではないだろうか。

宮の、月を見ているか問い合わせる贈歌に対して、女は次の返歌を贈る。

ふけぬらむと思ふものから寝られねどなかなかれば月はしも見ず

夜が更けても寝られないが、月を見ると返つて物思いがつのるので月は見ないことにしているという意の歌である。しかしながら、本文中に、宮の贈歌を詠んだ女は「うちながめられて、つねよりもあはれにおぼゆ」というように、実際は月を眺めていたということを示す記述があり、女の

返歌の内容とは事実が異なる。つまり、女は、宮の問い合わせに対して月を見ていたにも関わらず、敢えて「月は見ない」という旨の歌を返したということである。このように、敢えて事実とは異なる歌を宮に返したことは、贈答歌の中でどのような効果があつたのだろうか。まず、この返歌を受けた宮の心情表現を確認すると、「おしたがへたる心地して」と、意表をつかれた気持ちであると述べられている。このことから、月を見ているかと問い合わせた宮は、当然女の方でも月を見ているだろうという確信があり、女の返歌でも同じく月を見ている様子を詠んだ歌を返してくると期待していたということがわかる。さらに宮はこの女の返歌を受けて「『なほ口惜しくはあらずかし。いかで近くて、かかるはかなしことも言はせて聞かむ』とおぼし立つ」というように、女を再評価し、自邸入りさせる決意にまで至っている。つまり、宮は、女は敢えて意表をつく歌を返してきたのだと、女の技巧を理解したということである。

このように、女が相手の意に反するような歌を贈ることが、宮の心情に効果的に作用したのは、相手も自分と同じように月を眺めているということを、お互いが確信していながらである。逆に言えば、その確信が女と宮どちらか一方にしかなかつたならば、この贈答歌は成り立たなくなってしまう。女による宮の意表をつく返歌は、もちろん自分も宮と同じように月を見ているということを前提として、

月に寄せた、宮を想う心をより一層強く表現することに成功していると言えよう。このように、この贈答歌のやりとりから読み取れる点は、この場面では宮と女が互いに月を見ているということが前提となっており、異所にて同じ月を見ているという行為そのものを互いに確認し合うということには、もはや重点は置かれていらないという点である。つまり、月そのものが相手への想いを表す象徴として描かれていることが読み取れるのではないだろうか。

これまで、和泉式部日記における月が描かれた場面を六箇所挙げて、それぞれの場面の月の特徴を検討してきた。では、それらに見られる特色は、女と宮の恋愛の発端から女の宮邸入りまでの恋愛の過程の中においては、どのような変遷が見られるのであろうか。次は、恋愛の展開という日記の中の時間の流れという観点から、これまで挙げてきた場面を確認していく。

まず、I 初めての逢瀬の場面と、II 宮が女を「人もなき廊」に連れ出す場面は、宮と女の恋愛の発端の時期の逢瀬を描いた場面である。それぞれの逢瀬には、次のような共通点が挙げられる。

- ① どちらの場面も月が「いと明し」「いと明ければ」というように、同じ情景描写がされている点
- ② I では宮が、II では女が、それぞれ月に照らされることに對して嫌な思いを抱いている点

① どちらの場面も月が「いと明し」「いと明ければ」というように、同じ情景描写がされている点

② Iでは宮が、IIでは女が、それぞれ月に照らされる二に対して嫌な思いを抱いている点

IとIIの場面の間にも、二回ほど女の元に宮が来訪しているが、そのうちの一回目は女が精進の身であつたためともに宮と取り合おうとせず、二回目は宮の来訪に女が気づかず眠つていたため逢瀬が叶つていない。また、その二つの場面の情景には月が描かれることはない。それを踏まえると、I、IIの場面は、女と宮の恋愛が始まつて以降、日記に描かれる逢瀬の中で、女と宮のやり取りが成立した第一回目と第二回目にあたる逢瀬と言える。初めての逢瀬は恋愛の発端の場面の中で重要な位置にあると言えるであろう。また、IIの場面も先に述べたように、後に女と宮が回想したり、当時の物語の類型が見られたりすることから、日記内で印象的な場面として描かれていると言える。先ほど挙げた、そのような二つの場面における共通点の①からは、印象的な二人の逢瀬には明るい月が描かれるということ、②からは、その明るい月は、日記の読者だけではなく、日記内に登場する女と宮にも逢瀬の中で意識される情景であつたということを読み取ることができる。このようにして、I、IIの場面で描かれる月は、女と宮の逢瀬と結び付く。

けられるような印象を与えていると言えるのではないだろうか。

III 同車行を回想する場面において、「月のいみじう明き夜」というように描かれる明るい月は、女と宮がIIの同車行を思い出させる材料として登場している。しかし、女と宮が同じ出来事を回想しつつも、その思いは両者の間でぴったり重なるとは言えないことが、贈答歌から読み取れることは先に述べた。月が明るいという情景から逢瀬を想像させ、実際この場面の次の日に宮の来訪があるが、女の方では気づかず、宮の疑念を深めることとなつた。また、そのようにある特定の出来事を思い起させる材料として登場した月は、IV月の和歌四首を詠み合う場面においてはその役割を越えて再び登場する。それは、女の贈答歌から読み取ることができ、月そのものが、宮を想う気持ちと重ねあわされるという役割である。この場面も「月の明き夜」を情景として宮との逢瀬が実現している。ある出来事を思い出す材料としての意味を離れ、女の歌からは月そのものに宮を想う気持ちを寄せていることが読み取れる。しかし、このIVの場面で交わされる贈答歌に詠まれる月すべてが、女と宮でぴったりと重なるものではない。そして、III、IVの場面は、恋愛の展開の中でも宮が女の多情な噂を聞いたり、宮の来訪がありながらも逢瀬が叶わなかつたりして、宮の疑念が深まる期間である。そのような二人の気持ちの

起伏は、III、IVに見られる女と宮の歌における月の使われ

方の食い違いにも表れていると言えるのではないだろう

か。お互いの月への認識の重なりが読み取れるのは、長月の、V女が手習い文を贈る場面である。この場面が日記の中でも特に独自性を帯びた場面であることは先に述べた。

その中でも、「長月の有明の月」を背景として女と宮との間で歌が交わされるが、その中で日記中において初めて「おなじ心」という言葉が登場し、女と宮の相手を想う心の重

なりがはつきりと記述される。この場面を契機として、それ以降女と宮の両者において、「月の明るい夜に月を眺めて相手のことを想う」という、共通した月に寄せる心が表れるようになるのである。そして、VI宮が女を自邸に置くことを決心する場面の贈答歌では、「同じ月を見る」という行為 자체を共有する意味を越えて、月が二人の愛情の象徴として描かれるようになる。

このようにして、日記内に多く登場する月は、女と宮の恋愛の始まりから明るく輝く景物として登場し、恋愛の発展の中で、両者の揺れ動く気持ちや関係性にも対応するようを使われ方が変容しているのである。「女の宮邸入り」の話が進みお互いの関係が安定してきたころには、月の使われ方も両者のうちで重なるものになつていったと言えるのである。

二

前章で述べた、和泉式部日記において独自性の強い場面として挙げられる、V女が手習い文を贈る場面について、そこに記される「長月の有明の月」に注目し、女と宮の恋愛の発展の中でどのような役割を持つた場面なのか、またそれはどのように作品に描かれているのかを検討する。

まず、この場面の本文を確認する。

九月二十日あまりばかりの（乙）有明の月に御目さまして、「いみじう久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらむかし。人やあるらむ」とおぼせど、例の童ばかりを御供にておはしまして、門をたたかせたまふに、女、目をさまして、よろづ思ひつけ臥したるほどなりけり。すべてこのごろは、折からにや、もの心細く、つねよりもあはれにおぼえて、ながめてぞありける。あやし、たれならむと思ひて、前なる人を起こして問はせむとすれど、とみにも起きず。からうじて起こしても、ここかしこのものにあたり騒ぐほどに、たたきやみぬ。「帰りぬるにやあらむ。いぎたなしとおぼされぬるにこそ、もの思はぬさまなれ。おなじ心にまだ寝ざりける人かな、たれならむ」と思ふ。からうじて起きて、「人もなかりけり。そら耳をこそ聞きおはさうじて、夜のほどろにまどはかかる。騒

がしの殿のおもとたちや」とて、また寝ぬ。

女は寝で、やがて明かしつ。いみじう霧りたる空をながめつゝ、明くなりぬれば、このあかつき起きのほどのことどもを、ものに書きつくるほどにぞ例の御文ある。ただかくぞ、

秋の夜の有明の月に入るまでにやすらひかねて帰

りにしかな (c)

「いでやげに、いかに口惜しきものにおぼしつらむ」と思ふよりも、「なほ折ふしは過ぎしたまはずかし。げにあはれなりつる空のけしきを見たまひける」と思ふに、をかしうて、この手習のやうに書きゐたるを、やがて引き結びてたてまつる。

御覧すれば、

風の音、木の葉の残りあるまじげに吹きたる、つねよりもものあはれにおぼゆ。「ことゞ」としうかき疊るものから、ただ氣色ばかり雨うち降るは、せむかたなくあはれにおぼえて、
秋のうちは朽ちはてぬべしとことわりの時雨にた
れが袖はからまし
嘆かしと思へど知る人もなし。草の色さへ見しにもあらずなりゆけば、しぐれむほどの久しだもまだきにおぼゆる風に、心苦しげにうちなびきたるには、ただ今も消えぬべき露のわが身であやふく、草葉につけて

かなしきままに、奥へも入らでやがて端に臥したれば、つゆ寝らるべくもあらず。人はみなうちとけ寝たるに、そのことと思ひわくべきにあらねば、つべづくと目をのみさまして、なごりなう恨めしいう思ひ臥したるほどに、雁のはつかにうち鳴きたる、人はかくしもやはざるらむ、いみじうたへがたき心地して、

まどろまではれ幾夜になりぬらむただ雁がねを

聞くわざにして

とのみ明かさむよりはとて、妻戸を押し開けたれば、大空に西へかたぶきたる月のかげ、遠くすみわたりて見ゆるに (b)、霧りたる空のけしき、鐘の声、鳥の音ひとつにひびきあひて、さらに、過ぎにし方、今、行末のことども、かかる折はあらじと、袖のしづくさへあはれにめづらかなり。

われならぬ人もさぞ見む長月の有明の月にしかじ
あはれは (b)

ただ今、この門をうちたたかする人あらむ、いかにおぼえなむ。いでや、たれかかくて明かす人あらむ。(c)
よそにてもおなじ心に有明の月を見るやとたれに
問はまし (f)

宮わたりにや聞こへましと思ふに、たてまつりたれば、うち見たまひて、かひなくはおぼされねど、ながめゐたらむにふとやらむとおぼして、つかはす。女、

ながめ出してゐたるにもて来たれば、あへなき心地して引き開けたれば、

「秋のうちは柄ちけるものを人もさはわが袖とのみ

思ひけるかな

消えぬべき露のいのちと思はずは久しき菊にかか

りやはせぬ

まどろまで雲居の雁の音を聞くは心づからわざ

にぞありける

われならぬ人も有明の空をのみおなじ心にながめ

けるかな

よそにても君ばかりこそ月見めと思ひて行きし今

朝ぞくやしき

いと開けがたかりつるをこそ」とあるに、なほもの聞

こえさせたるかひはありかし。

(四七一五二)

これ以前の場面において、女は石山寺に籠つていたのが、「山を出でて暗き道にぞたどり来し今ひとたびのあふことにより」(四六)という歌を宮に贈り、宮に逢うことにして、山籠りをやめ、山から出て来てしまう。しかしながら、それ以降この場面に至るまで、女と宮との逢瀬は叶っていない。

この場面の冒頭部の「九月二十日あまりばかりの……」

(a) という記述は、応永本、寛元本では「九月十日ばかり」

かりの……」となつてゐる。また、新古今和歌集には次のようにある。

九月十日余り、夜更けて、和泉式部が門を叩かせ

侍りけるに、

聞きつけざりければ、朝に遣わしける

大宰帥敦道親王

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな

「秋の夜の……」の歌を詠んだ、日付の表示については、「九月二十日あまりばかり」と「九月十日ばかり」の二説に分かれる。しかし、一般的に有明の月で描かれるのが二十日過ぎであることから三条西家本によつて「二十日あまりばかり」と改められたことが従来から指摘され、諸注釈もこれに従つており通説になつてゐる。

一方で、この「二十日あまり」という記述に關して森田兼吉氏⁽⁸⁾は、手習い文中の「大空に西へかたぶきたる月のかげ、遠くすみわたりて見ゆるに」(b)という部分を挙げ、「西に傾いた月がうつされている。ところが、二十日を過ぎた月であつては、その時にはまだ西にかたむいているとはいいがたい」と指摘している。また、宮の「秋の夜の有明の月のいるまでにやすらひかねてかへりにしかな」(c)という歌もまた西に傾く月を描写した歌だということも合わせて、この場面は九月二十日以前のことだと論じて

いる。また、吉田幸一氏⁽⁹⁾は、この森田氏の論に寄せて、次のように述べている。

通説の拠り所になつてゐる三条西家本の「九月廿日あまり」はいかに、といへば、これはいはゆる有明月とは、源氏物語その他の古典に描かれてゐるもののは大部 分廿日以後の月として記されてゐるという常識から判断されて、この日記の「十日よ日」を後人が「廿日あまり」と恣意的改訂を施したものであろうと思ふ。……ともあれ、この日記の曉起きと感想文に描かれてゐる月そのものは、いはゆる一般的な廿日以後の半月乃至下弦月の有明月ではなかつたことにおいて、他の作品の用例と比較すべくもなく、既述のやうに満月後間もない明るい月であつたことを知れば、……常識的な有明月の月日にこだはつて解釈される必要はなくなるものと考へる。

ある。「九月二十日あまり」という描写は、「有明の月」が見えるかどうかという点によつては、吉田氏の述べるよう、三条西家本による改ざんである可能性は高いだろう。しかしながら、どちらの日付においても問題があると言える。どちらの本文にしろ、ここでの論点となつてゐるのは「有明の月」の存在である。この場面にわざわざ「有明の月」を描くということは、この場面の背景として、日付とは別に、「有明の月」を描かなければならぬ何らかの意味が付与されていると考えられるのではないか。特に、本文中に描かれる「長月の有明の月」は、一般的な月日とは違つた「長月の有明の月」特有のイメージを持つて本文中に描かれることになつたのではないかということが考えられるのである。

和泉式部日記のこの場面において「長月の有明の月」がどのような効果をもたらすものなのかを明らかにするにあたつて、まず、「長月の有明の月」が和泉式部日記以前の和歌の中では、どのような素材として用いられていたのかを確認する。そして「長月の有明の月」にしかない発想とはどのようなものなのかを検討する。

和泉式部日記以前に、「長月の有明の月」が詠まれた歌において、その使われ方を確認すると、まず、有明の月自体の美しさや、それが照らす情景の美しさを詠んだ歌が確認できる。例えば、

白露を玉になしたる長月の有明の月よみれどあかぬか

も

いづれをか花とはわかむ長月のありあけの月にまがふ

白菊

(古今六帖 三六七)

ある。

しかし、ここで「長月」だけに着目すると、長月は、「菊」

の語と共に歌に次のように詠まれている。

露とてあだにやは見る長月の菊は千歳を過ぐと思へ

ば (古今六帖 五八八)

祈りつつなほ長月の菊の花いづれかの秋か植ゑて見ざ
らん

(貫之集 三九七)

霜のおくのこりのきくはながつきのながきためしにほふなるらし

(伊勢大輔集 六九)

このような、「長月」と「菊」の組み合わせの歌は、中國の「菊の露」という故事が元となっている。この故事は、初学記や芸文類聚にも確認でき、菊を長寿や幾世にも渡ることの象徴として用いる源泉となる故事である。長月は、その菊の盛りの時期であり、九月九日の重陽の時期に当たる。そのため、永遠性といふ発想は、「長月の有明の月」に限つたことではなく、「長月」と「菊」の組み合わせからも連想され歌に詠まれるのである。さらに、九月を「長月」と呼ぶことの由来に関して、拾遺集(五一三~五二三)に次のような、伊衡と躬恒の問答歌があることが指摘されている。

次に、永遠的なものの例えとして「長月の有明の月」を詠んだ歌が確認できる。例えば

出でてくる山もかはらぬなが月の有明の月の影をこそ
みれ

(貫之集 六八)

なが月の有明の月もありつつも君しきまさばわれも忘
れじ

(古今六帖 三六四)

といった歌が挙げられる。貫之集の歌は、いつも同じ山から同じ月が出てくることに、変わらぬものの素晴らしいしさを重ね合わせて詠んでおり、古今六帖の歌は、恋人の訪れが長月の有明の月のように長くずっと続くことを願つた歌で

夜星の数は二十にあまらぬをなど長月と言ひはじめけ
ん

秋深み恋する人の明かしかね夜を長月といふにやあら

ん

なぜ九月を「長月」と呼ぶのか問う歌に対し、答歌では、「長月」に「夜を長」を掛け、恋人を想う気持ちが、秋の深まつた夜に一層長く感じられるから九月を「長月」と言うのだと推測している。この歌の意が本当に「長月」の語の由来であるとは言い難いが、「長月」そのものが時間的な長さを連想させる語であつたということは言えるだろう。

また、初学記、芸文類聚の「月」の項に、

釋明日月闕也満則缺也晦灰也月死為灰月光盡以之也朔蘇也月死復蘇生也

という記述が確認できる。のことから、月そのものが、一度死んでも再び蘇るという永遠的なものの象徴としての意味を持つていたと言える。

次に、「長月の有明の月」を詠んだ歌では、秋が去るのを惜しむ気持ちを詠んだ歌が確認できる。例えば、もみぢはのちりくる見れば長月のありあけの月の桂なるらし

(後撰集 四〇二)
長月のあり明けの月は見えながらはかなく秋は過ぎぬべらなり
(古今六帖 一九九)

といった歌が挙げられる。これらの歌は、紅葉が夢く散つて行き秋が過ぎ去つていく様子と、翌朝になつてもうつすらと、長い時間空に残る有明の月という二つの情景が同時に

に詠まれている。落葉と有明の月は、夢い様子という点では共通しながらも、その時間的な長さでは対照的な二つの景物である。それらを同時に描くことで、秋があつけなく終わることへの無常観をより一層際立てるものとなつていると言える。時代が下ると、有明の月は、

花のいろはやよひのそらにうつろひて月ぞれなきあたりあけのやま
(秋篠月清集 九〇九)

と「長月」だけではなく、院政期以降は「弥生」にも多く詠まれるようになり、さらに「水無月」、「師走」に詠まれる例も出てくるが、これら以外の月に詠まれる例はほとんどない。「有明の月」が季節の終わりにその移り変わりを惜しむ素材として定着していったことが分かる。

和泉式部日記以前に「長月」以外の月で「有明の月」が詠まれた歌が無いという点と、「弥生」、「水無月」、「師走」と「有明の月」が詠まれた歌のそのほとんどが季節の移り変わりを惜しむという歌であるという点から、次のようなことが考えられる。一つは、和泉式部日記以前から「長月」においては「有明の月」は様々な心を詠むのに多く用いられており、「長月の有明の月」という表現が慣用句的に用いられていたということであり、もう一つは、院政期ごろから、「弥生」、「水無月」、「師走」といった月と「有明の月」の語が共に詠まれるようになるが、その際には「長月」の場合に見られた、秋から冬に夢く移り変わる際の景物と

いう意味の「有明の月」の使われ方だけが残り、季節の移り変わりを惜しむ歌に用いられるようになつたということである。歌の中で「弥生」「水無月」「師走」に見られる「有明の月」の使われ方は、季節の移り変わりを惜しむといふ「長月」での使われ方が元となつてゐると考えられるが、そのような他の月への転用がなされたのも、「有明の月」 자체が、季節の移り変わりというイメージと、非常に結びつきやすい題材であつたためと考えられる。

次に、「長月の有明の月」を詠んだ歌として、

今こむといひしばかりに長月の有明の月をまちいでつるかな
(古今集 六九一)

のような、女が恋人を明け方まで待ちつくす様子を詠んだ歌が見られる。これは、素性法師によつて、女の立場に立つて詠まれた歌で、すぐに入ると言つて別れた人を明け方になるまで縁側で月を見ながら待ちつくす様子が描かれる。女が、「すぐに来る」と言つたある特定の恋人を想定して詠んだかのようだ、ひとつの物語的な情景を浮かび上がらせる歌であるように感じられる。もともと、「有明の月」は、後朝の時間に見えることから、

有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし
(古今集 六二五)

帰りつる名残の空をながむればなぐさめがたき有明の月

(千載集 八三八)

に見られるように、恋人との後朝の別れを惜しむといった、恋の歌に多く詠まれる題材である。そのような恋の歌の中で「長月の有明の月」が詠まれた歌に限定すると、恋人を待ち逢瀬が叶わない様子を詠んだ、素性法師の歌が挙げられるのである。また、この素性の歌は、俊頬體脳、古來風体抄、奥義抄、和歌體十種など、古くから多くの歌学書に引用されているものであり、素性の代表的な歌として、平安時代に非常によく知られた歌であつた。特に、和歌體十種においては、「余情體」という項で「詞標一行義籠万端」と説明されている。それを踏まえて素性の歌を見ると、恋人を待つ女の寂しい気持ちと、夜の長い長月であるのに、有明の月が出る時間まで長い時間待ちつくす様子が描かれしており、女の心情、情景、時間の長さという様々な様子を読み取ることができると言える。ここまでに挙げてきた、「長月の有明の月」の歌の様相を全て踏まえている歌であると言えるだろう。そのような意味では、女が恋人を明け方まで待ちつくす様子を表す、素性の歌は、「長月の有明の月」を詠んだ歌の中で、非常に独自性の強い歌であると考えられる。

それを踏まえた上で、和泉式部日記の女が手習い文を贈る場面の、宮が女の邸を訪問したが会うことができず、その気持ちを歌にして女に贈った際の情景と、素性の歌とを照らし合わせると、そこに次のような共通点を発見するこ

とができる。

- ① 逢瀬が久しくなつてゐる点
- ② 会いに来ない（門から出てこない）恋人を、長月の有明の月の下で待ちながら歌を詠む点
- ③ 逢瀬は叶わず、歌の詠み手は独りで有明の月を眺める点
- ④ どちらもそれ以前に、恋人から逢瀬を期待させる言葉があつたという点（素性の歌は「今こむといひしばかりに」からそれが読み取れ、和泉式部日記では女が石山寺に籠つた際、宮に会うために山篭りをやめて山から出てきたという内容の歌を贈つていることから読み取れる）

これらの共通点を踏まえると、和泉式部日記のこの場面は、素性の歌が背景になつてゐると考えられるのではないだろうか。鈴木徳男氏⁽²⁾は、定家が「今こむと」の歌をどのように享受していたか検討する中で、和泉式部日記における受容についても触れ、「『今こむと』の素性歌には、『日記』中の手習文を送る契機となつた帥宮の歌と対応している」と、和泉式部日記と素性の歌との共通点について述べている。しかしながら、このような共通点がある一方で、宮の歌との相違点も存在する。また、宮の歌以後の女が手習い文を贈る場面の展開には、素性の歌からは窺えないと展開も見ることができる。その相違点や、素性の歌から離れた和泉式部日記独自の展開を次に挙げる。

① 素性の歌では、女が待つ歌であるが、和泉式部日記では宮の視点から場面が描かれ、宮が待つ歌を贈つており、男女が逆転している点

② 和泉式部日記では、宮が先に女を待つ歌から描かれるが、その後、女の手習い文によつて、女もその時間に同様に宮を待つていたことが明らかになる点

③ 和泉式部日記では、逢瀬こそ叶わないものの、文を交わすことで「おなじ心」を通わす点

和泉式部日記が、日記中多くの引歌を用いながら描かれていることや、素性の歌が当時の素養として知れ渡つていただろうことを踏まえると、素性の歌が和泉式部日記のこの場面の背景として踏まえられていることは充分考えられるのではないだろうか。しかし、和泉式部日記のこの場面全てが素性の歌に沿つているとは言えず、相違点や独自の展開も同時に読み取れるのである。

誰もが素養として認識し得る出典を、作者が自らの作品の題材として構成に反映させることで、作品の見せ場をより読者に印象付ける方法は、源氏物語にもその例を見ることができることが玉上琢彌氏⁽³⁾によつて指摘されている。和泉式部日記の女が手習い文を贈つた場面も、前述したように、日記内で独自性を帯びた場面であり、また初めて「おなじ心」が描かれた場面として重要な位置にあると言える。

このような場面において、素性の歌を背景として描くことは、その叙述の展開にどのような影響や効果をもたらしていると考えられるのだろうか。素性の歌との相違点に着目し、素性の歌を出典としているであろう場面と、その出典を離れ独自の展開を読み取ることができる場面を、本文に沿つて確認する。

まず、場面冒頭の「九月二十日あまりばかり」から、宮の「秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな」の歌までは、宮が女を門の前で待ち、逢瀬の叶わない様子が有明の月の情景と宮の歌とで描かれている。その様子は、素性の歌における女の寂しさと長い時間待ちわびて逢瀬が叶わないという情景を、男女を逆転した形で宮に投影して読者はこの場面を読むことができる。この場面以前にも、宮の来訪がありながら女がそれに気付かず逢うことことができなかつた場面が二度描かれていることから、そのパターンと重なり、読者は再び叶わない逢瀬を予感し得ると言えるだろう。しかし、次に描かれる女の手習い文の「われならぬ……」(d)、「よそにても……」(e)の歌や、

「ただ今、この門をうちたたかする人あらむ、いかにおぼえなむ。……」(e)といった記述から、女の方も同様に、

おわりに

これまで、和泉式部日記に描かれる月にはそれぞれどのような特色があるのか、それが日記内に描かれる女と宮の恋愛の展開にどのように作用しているかについて検討してきた。宮の来訪を期待して夜を過ごしていたことが明らかにされる。読者は、宮のみに投影していた素性の歌を、女の場合にも同様に当てはめられることに気がつくのである。さら

に、素性の歌も、和泉式部日記のこの場面も、逢瀬は叶わないが、和泉式部日記の方では、女の手習い文とそれに対する宮の返歌から「おなじ心」を通い合わせる結果となり、女の満足のいく心情の描写で終わる点が、素性の歌からはなれた独自の展開であると言える。この場面以降、同じ月を見て情趣を解することがお互いの共通認識となっていくことは第一章にて述べた通りである。そのことからも、この場面は女と宮の恋愛の過程において重要な結節点と言えよう。素性の歌を踏まえて描くことで、この場面をより読者に印象付けることが可能になつていているのである。また、日時の矛盾が指摘される「長月の有明の月」という表記も、素性の歌を読者に想起させるための仕掛けの一つだと考えることができるのではないだろうか。以上のことを踏まえると、この場面は、日時の描写の信憑性よりも、物語を展開していく上で、より印象的な場面にするための執筆時の構成意識が働いている場面であると考えることができる。

きた。女と宮の恋の発端から、女が宮邸入りをするまでの恋愛の過程において、月は、情景、女と宮の歌に多く登場し、それが恋愛の展開と共に意味も変遷していることがわかった。恋愛の発端の頃は、女と宮の逢瀬に輝く情景として月が登場する。それぞれ、初めての逢瀬や、同車行といった印象的な逢瀬の場面に登場する月は、似たような情景描写が繰り返されたり、当時の物語の類型などを踏まえた物語展開の中に描かれたりすることで、読者に月が女と宮の逢瀬に結びつけるような印象を与えていたと言えるのである。恋愛が進むにつれて、やがて月は単なる情景を描写する役割から離れ、女と宮それぞれの想いと重ねあわされて用いられるようになる。女の多情な噂に宮が翻弄され、二人の関係が不安定な時期は、その月の使われ方においても、女と宮では食い違いが見られる。そのような月の用いられ方に、女と宮とで共通の認識が現れるのが、女が手習い文を贈る場面である。この場面は特に独自性の強い素材であると考えられ、その物語展開は「長月の有明の月」という言葉から連想される、素性法師の「今こむと」の和歌が踏まえられていることが考えられるのである。しかし、素性法師の和歌との共通点がありながらも、その相違点も同時に確認でき、それこそが素性法師の歌から離れた、和泉式部日記独自の物語展開であると言えるのである。それは、恋愛の展開の中で、初めて「おなじ心」という言葉で

気持ちを表すこととなる、この重要な場面を、より読者にとって印象的な場面として描き出す、執筆時の構成意識の表れであると考えられるのである。この手習い文の場面以降に登場する月は、「月の明るい夜に月を眺めて相手のことを想う」という共通した意味で用いられるようになり、宮が女を自邸入りさせることを決心する場面においては、月そのものが二人の愛情の象徴として描かれるようになる。宮邸入り後、月の描写は一切描かれなくなるが、それは女と宮がそれぞれ別の場所で月を見る必要がなくなり、それまで異所で共有してきた「おなじ心」が、もはや同じ場所で完成されたことの表れなのではないだろうか。

このようにして、日記内に登場する月は、二人の恋愛の展開に対応するようにして、その用いられ方にも変遷が見られると言える。しかし、それぞれの場面に描かれる月の用いられ方自体は、和泉式部日記独自の発想のものは見られず、当時の月に対する様々なイメージを、場面に応じて日記内に反映させていていると言えよう。

和泉式部日記は、女と宮の恋愛の発展に主軸が置かれていることは確かである。しかし、恋愛に関わる場面に多く登場する月を詳しく検討すると、そこには、同じ描写の繰返しや、物語の話型の使用、古歌を出典として用いるなどといった、読者を想定した執筆時の構成意識が窺え、それは時に、日時的な描写の信憑性を超えて日記内に描かれ

ていると言える。和泉式部日記においては、女と宮の心理的な恋愛の展開だけでなく、執筆時の構成意識も念頭に置いて理解する必要がある。そのことは、日記中ににおける月の描かれる場面からはつきりと理解することができるるのである。

注

- ・ 和泉式部日記、蜻蛉日記、源氏物語、紫式部日記は新編日本古典文学全集より本文を引用し、該当箇所の頁を付した。
- ・ 古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集、千載和歌集、新古今和歌集、古今六帖は新編国歌大観より本文を引用した。貫之集、伊勢大輔集、秋篠月清集は私家集大成（CD・ROM版）より本文を引用した。万葉集は、新編日本古典文学全集より本文を引用した。万葉集は、新編日本古典文学全集より本文を引用した。なお、漢字かな表記を改め、傍線を付したところがある。
- ・ 白氏文集は新訛漢文大系、初学記は中華書局版、芸文類聚は上海古籍出版社版より本文を引用した。
- ・ 本稿において引用した和泉式部日記の注釈書は以下の通りである。本文中では略号で示した。
（新註）玉井幸助『和泉式部日記新註』（昭和二十五年十一月　世界社）
（詳解）小室由三・田中榮三郎『和泉式部日記詳解』（昭和二十一年二月　池田出版）

八年二月　池田出版

（考注）尾崎知光『和泉式部日記考注』（昭和二十九年十一月　文京書院）

（大系）日本古典文学大系（遠藤嘉基　昭和三十一年十二月　岩波書店）

（全譜）円地文子・鈴木一雄『全譜和泉式部日記改訂版』（昭和五十八年十月　至文堂）

（新全集）新編日本古典文学全集（藤岡忠美　平成六年九月　笠間書院）

（全注釈）中嶋尚『和泉式部日記全注釈』（平成十四年十月　笠間書院）

（注釈）岩佐美代子『和泉式部日記注釈』（平成二十五年三月　笠間書院）

（1）高橋良雄『和泉式部日記』の月』（『月と文学』　昭和五十二年四月）
（2）（新全集）所収の藤岡忠美氏の解説を参考にした。
（3）吉田幸一『和泉式部日記研究』（昭和三十九年十月　古典文庫）

（4）鈴木隆司『蜻蛉日記頭頃面追考』（『国語国文』八十四卷七号　平成二十七年七月）

右論文中において、「一つの作品を成立させている力を考えるとき、そこには作者の思い以外にもさまざまな力を考える必要がある。……作者の思いからしか作品を考えないというのであれば、その作品について限られた一面からし

か論じられなくなってしまうし、偏った理解しかできなくなつてしまふ。」と蜻蛉日記について述べていることは、和泉式部日記についても同様であろうし、作者の、あるいは登場人物の感情のみから作品理解をしようとするには無理が生じてしまうだろう。

(5) 小松登美『和泉式部日記(上)』(昭和五十五年三月 講談社)

(6) 木村正中「和泉式部日記の特質」(『日本文学』十二号 昭和三十八年二月)

(7) 吉田幸一 注(3)に同じ

(8) 森田兼吉「和泉式部日記の帥宮の歌について」(『和泉式部日記論攷』昭和五十一年十二月 笠間書院)

(9) 吉田幸一 注(3)に同じ

(10) 鈴木徳男「定家の素性歌受容——長月の有明の月をめぐつて」(『中古文学』八十九号 平成二十四年六月)

(11) 玉上琢彌『源氏物語評釈』(昭和四十二年十月 角川書店)
玉上氏は、源氏物語の巻ごとの見せ場は、先行作品に拠つて構成されていると述べた上で、作者はある所でその出典を明示するが、読者がその出典に気がついたと同時に、物語は出典から離れ、独自の展開を見せるようになると述べる。

(あや・ゆうこ 平成二十七年度卒業生)